「明清の美」展によせて

戴熙筆「鴛湖春榴図巻」
（清・道光27年【1847】、兵庫県立美術館蔵）をめぐって

300年近くにわたって中国を統治した清王朝（1616～1912）は、康熙、雍正、乾隆三代の治世である17～18世紀に最盛期を迎えます。しかし乾隆年間の終わりには綻びが見えはじめ、以後は各地で相次ぐ反乱、イギリスとのアヘン戦争（1840～42）などの内憂外患に疲弊し、国家としては衰退の一途をたどります。本稿では、こうした激動の時代を生きた文人画家・戴熙（1801～60）をご紹介したいと思います。

戴熙は、銭塘（今の浙江省杭州市）の出身で、字を醇士といい、楡庵、蘊渓、井東居士など多数の號をもちました。軍の統率にかかわる兵部侍郎などを務め、道光30年（1850）から10年以上続いた太平天国の乱の際に、江南軍を指揮して討伐にあたるも、咸豊10年（1860）、太平軍との杭州包囲戦で敗れ、自ら60歳の生涯を閉じました。詩書画を善くする文人でもあった彼は、生前に多くの作品を残し、今日も少なからずの作が伝わっています。清朝のために最期まで戦った生きざまが忠臣の鑑と称えられ、彼の死後、多くの人々がその作品を得んことを求めたといいます。

戴熙の「鴛湖春榴図巻」（図1。兵庫県立美術館蔵）は、日本近代を代表する篆刻家の一人である梅舒適（本名：稲田文一。1916～2008）の旧蔵品で、墨一色で山水景を描きます。画面右上に戴熙による款記「鴛湖春櫂図。道光丁未五月、時軒大兄属戴熙画。」（句読点は筆者による）があり、画題のほか、本図が道光27年（1847）、戴熙47歳のとき、時軒なる人物のために制作されたことがわかります。また画面左には、同じく彼の書で七言絶句「雨後将晴却未晴。鴛鴦湖上一舟軽。洪濤巨浸都看遍。最好煙波祗是平。醇士附題。」（句読点は筆者による）とあります。なお戴熙の没後に刊行された著録『習苦斎画絮』（光緒19年【1893】刊）には、本図と同文の詩題を有する、同じく時軒のために描いたという「鴛湖春棹図」なる作品が録されていますが、これが本図のことなのかは、定かではありません。

画面は、横長のフォーマットを活かして、広々とした江水の景を表します。画面手前の陸地には樹叢と家屋がみえ、さらに左に眼を進めると、船頭が櫂をこぐ舟にひとりの文人が坐し、眼前の風景を見つめているようです（図2）。画面奥には、江上に伸びる砂洲と陸地に数件の家、たなびく霞に見え隠れする樹々があり、その向こうには遠山のシルエットが映し出されます。画中に鴛鴦の姿は描かれませんが、画題および詩題に込められたイメージと、本図に描かれるモチーフは概ね呼応しあっており、詩情豊かな風景が表されています。こうした、江上のなだらかな山々と水景を描く構図は、江南で伝統的に描かれてきた山水画のそれを継承したものといえます。

またモチーフは、潤筆と渇筆、濃淡の異なる墨を丁寧に重ねることで、岩容や樹叢に質感、厚みが生み出されています。この画風は、清時代の初め、前時代までの文人山水画の画風を集大成させ、以後の山水様式の主流を確立させた、いわゆる「四王呉惲」ら正統派の様式を明らかに学んだものです。戴熙は正統派のうちでも、「四王呉惲」の一人である王翬（1632～1717）に私淑したと伝わり、本業画家ではないものの真摯に古今の画を学び、その中で優れた画技を身に着けたことが、現存作品や文字史料から窺えます。

「鴛湖春榴図巻」とほぼ同時期に、戴熙は精力的な作画活動を行っており、代表的なものに道光26年（1846）の「山水図巻」（図3。京都国立博物館蔵）、同27年（1847）に同僚の祁寯藻のために描いた「憶松図巻」（北京故宮博物院蔵）、同28年（1848）、杭州天台山の有名な石橋を描いた「天台石橋図巻」（クリーブランド美術館蔵）などの優品が伝わります。これらの作品は、画面を埋め尽くすかのように岩塊などのモチーフを重層的に配し、濃淡もより明瞭で重厚な迫力を感じさせ、対して「鴛湖春榴図巻」は筆線などに大人しい印象を受けますが、かえってそれが、江水の景の瀟洒な趣をより深いものにしています。

画家としての戴熙の誇りを、彼の用いた印文にも窺うことができます。本図中にも捺されている「與江南徐河陽郭同名」（図4。朱文方印）は、「江南の徐熙、河陽の郭熙と、私は同じ名である」という意味と思われます。五代（10世紀）の花鳥画家である徐熙と、北宋（11世紀）の山水画家である郭熙は、いずれも中国美術史上、多大な功績を残した著名な画家たちです。戴熙にとって画を描くという営為は、同名で親近感をもつ二人を始めとする過去の偉大な画家達に想いを馳せ、その流れに連なる自身を確認することでもあったのでしょう。戴熙に限らず、当時の文人たちは、めまぐるしく移り変わる時代の流れを直に感じながら、変わることのない古き伝統を受け継ぐ書画骨董を愛で、ひとときの安らぎを清らかな山水世界に求めたのかもしれません。　（都甲さやか）

図1

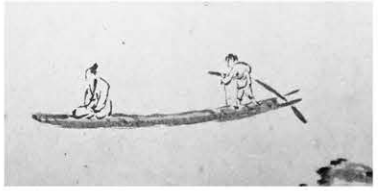

図2

図3

図4

※挿図3は『世界美術大全集　東洋編　第9巻　清』小学館、1998年より転載しました。

季刊 美のたより No.220
令和4年9月30日
発行　大和文華館

Copyright © The Museum Yamato Bunkakan. All RightsReserved.